

「伝える」ちから

会員 佐護 絵莉子



1 「1年生」としての2020年

72期の私は、最近弁護士「1年生」としての一年間を終えた。いわゆる外資系と呼ばれる事務所に入所し、気づけば、文字通り本当に気が付けば一年が経っている。

入所前は、外資系というと、華やかな格好をしてコーヒーを片手に（もしも英語がべらべらであったなら英語を話しつつ）仕事をするものだろうかと思われしてしまう不安もあったが、いざ入所すると大変優秀でありながら柔和な弁護士の先輩方、素敵なスタッフに囲まれ、穏やかかつ充実した日々を過ごしている。英語の読み書きの場面は多く、語学の壁にぶつかる日々である。外資系弁護士の業務は…と飒爽とお話ができれば良いのであるが、それ以前の問題に直面する一年であった。

日々痛感させられるのは、（語学の壁もちろんであるが）もっと根本的な、基礎的体力とでもいうべき「伝える」ちからの大切さである。

2 「伝える」ということ

どうやったら伝わるだろう。

この問いは毎日数回は反芻する問いである。法的な分析を依頼者に伝わるように引き直した表現にするとき。論点が多くあるとき。法的な帰結と一般的な感覚の帰結が離れているとき。自分の伝え方の拙さにまず直面する。

そもそも、相手に伝えるまでの間に、多くの過程があることにも気づかされる。依頼者の言わんとしていることは？ それを踏まえて、どう思考を積み重ねるか？ 積み重ねた思考をどう言葉に紡ぐか？ 中途半端に頭でっかちな思考と言葉遣い、無意識に前提としてしまっている知識が邪魔をする。

仕事をしていると、事務所の先輩方の姿を拝見して学ぶことは非常に多い。これに加え、大学院時代、修習時代にお世話になった先輩方の声が頭の中で再生されることも多い。「小見出し上手は起案上手」、「積み重ねることで（論理の）飛躍をなくすこと」、「話し方で伝わり方も変わる」。先輩方の声に背中を押してもらいながら、またPCの画面と睨めっこし、作業を進める。先輩方の「伝える」ことに対する熱意は確かに私の力となっている。

3 伝えることのリレー

伝えたい。伝わったら目の前の依頼者の助けになるかもしれない。依頼者から「よくわかりました」「助かりました」という言葉を聞けたとき、誰かのためになったのかもしれないと勇気づけられる。

一体、弁護士何年生の頃になるか想像がつかないが、いつか「伝え方」について、後輩の誰かに「伝える」日がくるのだろうかと思いつつ、筆を進めながらふと考える。こうやって、「伝える」ことは、依頼者の誰かに、そして後輩弁護士の誰かに繋がっていくのだとも感じる。

これまで言葉を贈ってくださった先輩方に対して、感謝の念に堪えない。

ある先輩弁護士が、依頼者と社会を繋いでいるという事実が弁護士としての矜持を支えると言及していた。自分はまだ「伝える」ことすらままならぬが、誰かのためになることを積み重ね、弁護士としての矜持を見つけないと切に願う。

とはいえ、弁護士として身につけなければならないことは、それこそ山ほどあるのに、「伝える」ことにこの文字数を使い切った。その未熟さを痛感しつつ、元気よく明日も2年生を駆け抜けようと気を引き締めた。